

社会福祉学会は資格や専門職養成にどのように関与するか？

今期は、上記テーマで 5 名の会員にお集まりいただき実施した座談会を 5 回に分けて連載します。今号は 2 回目で、自己紹介の続きから本格的な議論に入ります。

座談会にお集まりいただいたメンバーと、当日参加した広報員のメンバーは下記のとおりです。お忙しいなか、ご快諾、ご参加くださった会員の先生方に心よりお礼申し上げます。

登壇者：石川時子会員（関東学院大学）、口村淳会員（岡山県立大学）、菱沼幹男会員（日本社会事業大学）、三輪清子会員（明治学院大学）、渡辺裕一会員（武蔵野大学）

司会・広報委員会：岩永理恵（日本女子大学）、有村大士（日本社会事業大学）、任セア（立教大学）、大澤朋子（実践女子大学）、片山寛信（北海道医療大学）

第 2 回：自己紹介の続きから議論へ

渡辺：武蔵野大学の渡辺裕一と申します。武蔵野大学に来て、今年で 14 年目になってしまいました。自分自身の専門は高齢者福祉とソーシャルワークで、地域住民のエンパワーメントについて博士論文を書きました。現在は科研で、コミュニティー・オーガナイズの実践が、超高齢化した地域で実現可能なのかに関する実装研究に取り組んでいますが、実装研究の難しさというものにぶつかっています。

今回のテーマに関連しては、ソ教連の事業や調査に関わることなどがあり、ソ教連の活動を少し紹介させていただきます。ソ教連の事業計画に 2023 年度から位置づけられたのが、エデュケーション・ポリシーの策定です。各養成校は今、厚生労働省の出したシラバスやカリキュラムに沿って、社会福祉士に必要な指定科目等々を履修できるようなカリキュラム構成にしています。それは全体の大学のカリキュラムでいえば、三分の一から半分ぐらい。武蔵野大学でいえば、大体半分ぐらいです。一般教養などが入ってくると三分の一ぐらいです。そういう位置づけの中で指定科目を履修して、養成校を卒業する段階で学生がどういう姿になっているのか。何が身について、何ができる人がソーシャルワーク専門職なのかということをきちんと示そうということで、エデュケーション・ポリシーの策定に取り組んでいます。アメリカの文脈でいえば、その中に含まれるコンピテンシー、イギリスでは PCF (Professional Capability Framework) という考え方です。日本版のエデュケーション・ポリシーと、その中に含まれるコンピテンシーをきちんとつくっていきましょうということで、そういうプロジェクトチームが立ち上がっています。

こういう活動を通して考えているのが、先ほどカリキュラム変更の影響が大きかったということお話をしたように思うんですけど、自分自身はそんなにカリキュラム変更の影響の大きさは感じてません。実習が2か所になったことは、影響があったかもしれませんが、武蔵野大学では、実習の時期や実施方法を大きく変えてません。3年生の8月ぐらいから10月末ぐらいまでの間に1か所180時間やってたのが、2か所240時間になったという感じです。講義科目の時間数は減ってますし、学校でできることが増えたという感覚です。ディプロマ・ポリシーに沿った教育をしやすくなった感覚です。実習時間もまだ240時間で、もうちょっと増えてもと思うぐらいで、大きな影響がない。他の学校の動きを見ていると、結構大きく変えられたりして、そんなに大きく変える必要がなぜあったのかなと思うぐらいです。時間が増えた、2か所に行くのは大変では確かにあるんですけど、養成課程を今後どうするかなどに与える影響については、もしかしたら人口減少とか、18歳人口の減少とか、そういうものの影響が重なって見えてしまっている可能性もあるのではと思っています。例えば、精神保健福祉士と社会福祉士っていうのは、共通の部分が新しいカリキュラムで増えています。どちらかをやめるという話は、カリキュラム改訂の影響と言えるのかはわかりません。ただ、人口が減って、希望者が減って、社会福祉学を学ぶ学部・学科に進む人が少なくなっている。それで教員の数などを調整することや、それに伴う養成課程の取りやめは起きているということもあるのかと思います。それらは、先ほど石川先生がおっしゃったような職場環境とか条件とかも関係しています。この道を目指したいと思える人たちをどう増やしていくかっていうことを大学生だけじゃなく、全国的な国民的なレベルの中での議論をどうやって広げていくのかということは、すごく大きい議論ですけど、大事なんじゃないかなというふうに思いました。

岩永:ありがとうございます。なるほど、そうですね。先生方から興味深いご発言をいただいて、ここからの議論が楽しみです。議論に入る前に広報委員の先生方にも一言ずつご発言いただきます。

有村:私自身は三輪先生と被るのかなと思いますけれども、子ども家庭福祉と統計とか、調査法みたいなところを沢山やらせていただいております。私のテーマに関する意見は控えます。特に子ども関係で、今だと政策研究に数多く携わっています。よろしくお願いします。

任:立教大学の任セアと申します。専門は、高齢者福祉の中での介護人材の育成について研究をしています。私は職能団体の力が強くなると、その職業の社会的な地位と評価が上がると考える立場です。ですので、社会福祉学会でこのような企画を設けたことは、人材育成の研究してる私としては、社会福祉士の職業の地位と評価を今後上げていく契機になりそうで、とてもいいことだと思っています。先生方のご意見の中でも本当に様々な意見があると思うんですけど、本日、私もしっかり学ばせていただきたいと思います。と思っています。

大澤:実践女子大学にいます大澤と申します。私は、今、社会福祉士の養成ではなくて保育士養成で、ちょっと社会福祉士の新カリキュラムから離れてしまっているところがあります。非常勤先で社会福祉士の演習を1つか2つ持っているんですけども。それで、今年はじめて新カリキュラムでの実習を終えてきた4年生の演習をやっていて、2か所行くっていうのは面白いなと思って、学生たちの経験を一緒に学ばせていただいているところです。今日は大変楽しみにしておりましたので、どうぞよろしくお願いいたします。

片山:北北海道医療大学の片山と申します。僕も、もともと児童養護施設で働いていた現場経験があって、その頃から実習生の実習プログラムについて、どのようにソーシャルワークを見せればいいのか、そのような取り組みを体験していただければ良いのだろうかというところを悩みな

がらいて、今、養成する側に立って、施設さんに対していろいろ、「こういう体験ができるんじゃないでしょうか」などを提案しながら、担当職員の方と一緒に考えています。新カリキュラムで実習先が2か所になり、スペシフィックな現場に行く学生に対し、何を、どこまで、スペシフィックな知識を教えていくべきなのか、ジェネラリストの視点を教えるべきなのかなど、いろいろ悩みながらやっています。今日、皆様のお話お聞きできること、とても楽しみにしております。勉強させていただきます。よろしくお願いいたします。

岩永:ありがとうございます。先生方の自己紹介をうかがって、何かちょっとトピックを分けて考えられたらいいなと思ったんですけど。ちょっと私の頭の整理がつかないので、今、自己紹介いただいた上で先生方の中で、これをちょっと議論したらどうかとか、他の先生方の自己紹介に対してこういう意見がありますとかいうことがあれば、ぜひ出していただければありがたいです。

有村:先生方のお話をお伺いして思ったのですが、カリキュラムの中で変更になった部分、特に実習のところなどのお話なんかあるかなと思いました。あと、後半、どこかで学会が果たす役割のところは、しっかりお話いただいたほうがいいと思います。フリートークになっちゃうのかもしれませんが、各先生方からのご意見が結構生きるのかなというふうに思いました。

岩永:大変助かります。先ほど渡辺先生の大学では、新カリの影響はポジティブだというお話でした。私の所属する大学は、結構苦慮しております。精神保健福祉士の方は諦めたというような経緯もあります。おそらく、各大学における社会福祉学関係の学科の位置みたいなものが関わってるとは思います。それから先ほど渡辺先生がおっしゃったように社会福祉の不人気というか、閉じていく大学もあって、結構衝撃的なニュースが、この間ありました。まずは先生方のご所属の大学で新カリについて、どのような議論があったかとか、そのあたりのご経験をざくばらんにお話しいただくところからはじめられればと思います。